

裏口を出るとそこは新都庁 (左から山田、亀山、竹田、品川)

なものばかりで、個人が利用できる実用的でリーズナブルなものが出てきそうもありません。海外では国が支援するケースもありますが、民間企業の努力が目立ちます。これは会場からも出ていた言葉ですが、ユーザはメーカーに意見を伝える努力を、メーカーはそれを聞き検討する努力を行い、インタラクティブな環境を作ることができれ

ば、日本でも海外諸国のように実用的な機器が開発できるのではないのでしょうか。

この他、お馴染みのオプタコンⅡや拡大読書器なども展示されていましたが、あまりにもお馴染みの品なので紹介は省きます。関心のある方は各メーカーにお問い合わせあれ！

## ま と め

最後にこの二日間に渡るセミナーに参加して、改めて多くを感じることでなりました。セミナー全般を通じて、参加している当事者であるはずの視覚障害者自身がパネラーから飛び出すパソコン用語だけで困惑している状況は、一つには日本の視覚障害者の情報不足があります。当然と言えば当然のことで、これだけハイテク環境が進み、一見情報入手が容易になったかに思われる昨今でも、街に氾濫する文字情報メディアの多くは、私たち視覚障害者を取り残したまま、新たに光ファイバーを用いた産業ベースに突入し、より視覚的要素を深めています。コンピュータ(プログラム)を利用する以上、あらゆるユースに考慮することは、この技術先進国日本においてそれほどの難問とは思えないのです。何よりユーザとしての私たち視覚障害者と、メディアとしてその技術情報を提供する企業の意識の希薄としか言いようがありません。

しかし、現実に技術革新はこうしているうちにも刻一刻と変貌し続け、視覚障害者を取りまく環境は、より私たちを障害者へと追いやっていきます！ 全ての参加者がWindows (GUI) 環境における開発動向にはたいへん大きな関心をもっていました。もちろん我々だけの問題ではなく、これはパソコンを利用することで日常生活情報の入手、職域の拡大など、自らの存在に可能性を見いだしたかに思われた世界中の障害者に技術革新が新たに作り出した厚い壁ではないのでしょうか？

先端技術とは何か？ ユーザとは何か？ 世界の先端技術から30年もの時をとり残されてしまった日本の視覚障害者、日本にいる視覚障害者の一人として、私自身もVANGUARD!のメンバーも自分たちの現状を直視することから始めなければなりません。VANGUARD! (先駆者？先駆け)として、多くの問題と関わり進んでいきたい。

新たな者達へ目を注いで下さい！

セミナーを開催されるためにご尽力して頂いた多くの皆様に感謝します。

# アクセシビリティ関連機器のご案内

..... キヤノン株式会社 .....

## パソコンの画面表示にアクセスできる視覚障害者用点字ディスプレイ 「パワーブレイル40」

米国テレセンサリー社製。厚さ4cmの薄型のボディの中に充電式のニッカド・バッテリーを内蔵し連続して7時間使用可能。

点字表示部は8点40マスで、各点字マスに、コンピュータのカーソルを指定の点字マスまでワンタッチで呼び寄せたり、漢字の詳細読みなどに利用できる「タッチカーソル・ボタン」がついている。

インターフェイスはシリアルとパラレルの2種類のポートを装備しており、ほとんどのコンピュータに接続可能。



### お問い合わせ先

#### ◆輸入元

キヤノン株式会社 福祉貢献事業室  
〒163-07 東京都新宿区西新宿2-7-1  
TEL.03-3344-8503 (直通)

#### ◆販売元

東京ソフトウェア株式会社  
〒160 東京都新宿区新宿1-9-10 YKB東  
TEL.03-3350-3650

# 多、障害者雇用に取り組む企業

## 【第4回】

### 朝日新聞大阪本社

新聞報道では障害者雇用の促進について、毎日のように様々な論議がなされていますが、現実には報道機関や新聞社という職域には、障害を持つ社員が少ないのが実状です。そんな状況の中で、本年5月、朝日新聞大阪本社に「内本真奈美さん」という障害を持つ女性が、正社員として採用されました。しかも、「朝日新聞コミュニケーションホール」（愛称「アサコム」）という、新聞社と読者を結ぶ最前線で来訪する読者の対応に当たる、というのがお仕事の内容です。内本さんが、どんな仲間達とお仕事をこのアサコムでこなしているのか、また雇用主である朝日新聞社の今回の採用に至った経過や、採用後の状況など関係者一同にお集まりいただいて、お話をお伺いしました。

#### 彼女を採用して、周りの社員が刺激を受けた

竹中 お忙しいところお邪魔いたします。初めに人事課長の福本さんと、アサコム支配人でいらっしゃる向平さんにお話をお伺いしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。まず福本課長から、朝日新聞社全体の障害者雇用の現状などをお教えいただければと思います。

福本さん（以下敬称略） 残念ながらと言いますか、大変申し訳ないことではありますが、朝日新聞社として障害者の雇用は十分な率には達しておりません。しかし社会的責任という観点から、会社全体の厳しいリストラの中であって、障害者雇用だけは推進していかなば・・・と考え、努力しています。そのような状況の中で、アサコムから障害を持つ女性職員の採用希望が出たことか

お話し

人事課長

福本 芳嗣さん

アサコム支配人

向平 菱さん

読者室（アサコム）室員

河井 滯江さん

読者室（アサコム）室員

内本 真奈美さん

聞き手 竹中 ナミ  
写真 木地本昌弥

ら、今回の雇用に至りました。

竹中 すると、アサコムでは最初から障害を持つ職員の配置を希望されたのですか？

向平さん（以下敬称略） はい。事情を説明しますと、アサコムというのは毎日たくさんの読者の方々が朝日新聞社の見学に来られる、その窓口となる職場です。ここでは受付、案内、説明など大半の仕事を女子社員達を中心になって行っています。アサコムは、ベテランの女子社員の活躍によって支えられている、と言っても過言ではありません。このアサコムに見学に来られる個人や団体の方々の中に、障害をお持ちの方が近年大変増えてきました。むろん、現在の社員達で対応できないわけではないのですが、もしここに、ご自身も障害をお持ちで、見学に際してより適切な対応



福本さん（左）と向平さん（右）

ができる方がいれば、もっと素晴らしいのじゃないか、障害を持つ方ならではの体験に基づくアドバイスや感性を活かしてもらえないのじゃないか・・・と考えたのです。

竹中 人事課長として、そういった現場の提案に不安は感じられませんでしたか？

福本 不安がないと言えば嘘になりますが、朝日新聞社として新しいチャレンジだな、という気がしました。でも、結果としてお客様との接点、というか「朝日の顔」ともいえる場所に障害を持つ方に入ってもらって、大変よかったと思っています。

竹中 それは、どのような点からでしょう。

福本 障害を持つ方が配属されたから、というより採用された内本真奈美さんの人柄に負うところが大きいと思いますが、大変積極的に、なおかつ明るく仕事をこなすので、職場の雰囲気がよくなったのを感じます。

竹中 軌道に乗るまで心配されるようなことはありませんでしたか？

向平 自分の中に偏見があったんだなあ、という反省も込めて思うんですが、本人が明るいというのは、周りが障害にこだわらないということに繋がるんですね。採用前は、せっかくここに配属されたのだから、長続きしてもらえよう保護し

てあげなければ、という気持ちが実はあったんです。でも、彼女の明るさや積極性の前では、保護や同情どころか、むしろ周りの社員が刺激を受けて、よい方向へ「内部変化」が見られるほどです。こんな仕事は無理ではないか、雑用は頼めないのじゃないか、などなど・・・杞憂<sup>きゆう</sup>でしたね。なんでもやってみよう、とチャレンジされてる様子に、社員の方が「こりゃグチ言ってる場合じゃないなあ」と言い出したり（笑）。

竹中 過剰な気遣いや、保護の感覚はかえって失礼、ということでしょうか。

福本 私たち自身、大変よい勉強になったと感じています。そこで、アサコムの仕事のうち、大きなウエイトを占めている「朝日新聞社ビル見学のご案内」という仕事がありますが、これをぜひ彼女にもやってもらおうと思っています。

竹中 見学の人達を引率して、新聞社の仕事を見ていただく、というお仕事ですね？

向平 見学担当をするには朝日新聞社ビル内の配置図や、各部署の仕事内容が頭に入っているということと、拡声器の付いたハンドマイクを抱えてご案内しなければいけない、ということがあって、両腕に障害のある彼女には無理かな、と思ってたんですが、今は課長とも話し合って彼女にぜひ担当してもらおうと計画しています。

竹中 すると、拡声器をかつぐ練習ですか？

向平 いえいえ、とんでもない（笑）。彼女の身体的負担にならない軽さの物を探すか、作るかするという事ですよ。

竹中 なるほど、当然といえば当然ですね（笑）。で、彼女は名実ともに「朝日の顔」になるわけですね。雇用の創出、というのは既存の職場に障害者をはめ込むのではなく、その人のできる部分に考慮し、臨機応変に対応することから始まる、というよい例ですね。どうもお忙しいところ、ありがとうございました。

さて、続いてアサコムに採用された内本真奈美さんと、先輩社員の河井滯江さんのお話をお伺いしたいと思います。河井さん、内本さん、よろしくお願いたします。

### お仕事の内容は？

河井さん、内本さん（以下敬称略） こちらこそよろしく。

竹中 内本さん、5月からということですが、職場には慣れましたか？

内本 以前の仕事内容に接客という面で似ているので、仕事そのものには大分慣れました。でも、新聞社独自のセクション名や業界用語が飛び交うので、それにまだまだ慣れていない状態です。

竹中 以前のお仕事は、どのような職場だったのですか？

内本 企業の特例子会社でしたので、障害者が多数働いていましたが、私自身は一般の方々に混じって仕事をしたかったので、アサコムでの仕事はやりがいがあります。

竹中 河井さん、支配人から「ここは女性が仕切ってる職場だ」というようなことをお聞きしましたが、その「仕切ってる先輩」として内本さんに、どんな風な新人研修をされてるんですか？

河井 (笑) そんなに難しい仕事じゃないですし、接客というのは感性の部分の多い仕事なので、研修なんて特別には、やりません。仕切ってるかどうかは別にして、女性には働きやすい環境だと思います。

竹中 失礼なことを言ってすみません (笑)。河井さんからご覧になって、内本さんはどんな後輩ですか？

河井 すでに実務経験をお持ちなので仕事にそつが無く、性格も大変明るくて、こちらが励まされたりしています。力仕事などにも積極的に参加さ



内本さん

れて、周りに気を使わせない配慮のできる方ですね。性格もサラッとされてるのが嬉しいです。

竹中 なかなか高い評価ですね。内本さんは人見知りしない性格なんですか？

内本 本当は恥ずかしがりなんですよ (笑)。でも、早く仕事を覚えたいので、自分なりに一生懸命やっています。

竹中 アサコムでの仕事を簡単に説明していただけますか？

内本 まず、出勤時間が3パターンあります。Aは9:20~17:20、Bは10:00~18:00、Cが11:00~19:00という風に分かれていて、Aは閲覧用の新聞の仕訳とか、OA機器の立ち上げとか、つまりアサコムをオープンするための準備が、出勤してすぐの仕事になります。Bは、すぐ窓口業務につき、Cは、12時にスタートする見学のための準備をします。私はまだ見学の引率はしていませんが、記念撮影などのポラロイドの担当はしています。

竹中 見学というと、先ほど福本課長と支配人が、ぜひ内本さんにも見学担当を、と言っておられましたか・・・

河井 私も内本さんにはぜひ見学担当をしてもらいたいな、と思っています。引率の他に、見学記念にコンピュータで新聞を作る体験、というのもあるんですが、こちらの方はすでに内本さんにも担当してもらっています。これは前日から準備して、当日は文章と写真を入れて出来上がりというものです。内本さんはワープロがばっちりなので、この作業はすぐ覚えてくれました。

内本 データベースの検索もできるようになって楽しいです。

竹中 アサコムのデータベースって、どんなものですか？

河井 1984年以降の、朝日新聞の記事が全部入力されていて、アサコムでは来客が自由に検索できます。ご自分でできないお客様には、担当者が検索のお手伝いをするんです。

竹中 確か、新聞のデータベースというのはCD-ROMで発売されてますよね。結構高価なものだったような・・・

河井 1985年から91年までの52万件の記事を8枚のCDに収め、定価68万円で全国の紀伊國屋書店で販売していますが、アサコムに来ていただければ無料で検索できます。

竹中 これは、おいしい情報ですねえ（笑）。プリントアウトもしていただけますか？

河井 もちろんです。全国各地の地方版もそろっていますので、どうぞアサコムをご活用下さい。

竹中 お客様としては、閲覧や検索、見学の方以外にどんな方々が来られるんですか？

河井 「コミュニケーションホール」という正式名称の通り、ミニコンサートや、落語の定例会なども開催しています。市民の憩いの場としても利用していただきたいと願っています。

竹中 まさに、新聞社と読者の接点という職場ですね。それだけに、いろいろなお客様が来られるので、中には心ない方もおられるのじゃないですか？

河井 相当難しそうな場合は男性の上司に繋がります（笑）。内本さんに対しても、傷つけるような場面がないように、上司は案じていたようですが・・・

内本 幸い、よいお客さんばかりです。でも、心ない発言というのは通勤電車の中とか、日常的にいくらでも体験してるので、もしそんな方が来られても平気ですよ（笑）。何しろ、目立つ障害ですからいろいろなことを言われます。「悪いことしたら、ああなるよ」なんて子どもに言い聞かせるお母さんとか・・・慣れることは無いけれど、無視するようにしています。

河井 内本さんは堂々としてるところが、すごいですね。



河井さん

## 宝塚歌劇でリフレッシュ

竹中 内本さんの障害の原因はなんですか？構わなければ聞かせて下さい。

内本 障害の原因は、母が妊娠中に飲んだ薬だと聞いています。

竹中 内本さんとお母さんとの間で、葛藤などかなりあったでしょうね。

内本 障害が親子喧嘩のタネになったことなどは、ほとんどありません。母も、できるだけ普通の生活をするように育ててくれました。高校までずっと普通校だったので、健常者との付き合いが多く、障害者中心の社会に入ったのは前の職場が初めてでしたが、そこで初めて「障害者独特の考え方、感じ方」というのがあると知りました。

竹中 それはどのようなことでしょうか？

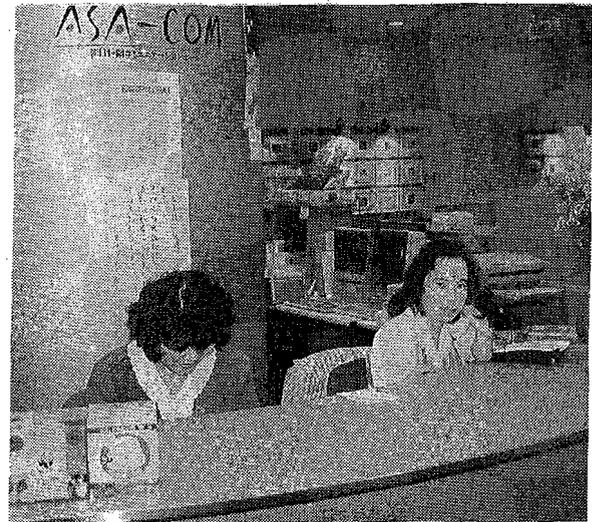
内本さん できることを精一杯しよう、というより障害があるから許してもらえる、という考え方があるということです。同じ種類の障害者仲間と仲がよいのは構わないけど、そのサークルでの団結を職場にまで持ち込む、というような「仲良しクラブ」の世界観がありました。これは、障害者と健常者の溝を自分から広げているのと同じだと思います。

竹中 大変厳しいご意見ですが、私も同感です。特に、障害を持つ人の職域を広げることが望まれる現状では、社会に出られた一人一人の障害者がバイオニアとしての役割も担うわけでもんね。

河井 内本さんは、すでに自分に対する厳しさを持っているので、それ以上無理をしないで、自然体でお仕事をしてほしいと思います。

竹中 お話を柔らかめに戻しましょう（笑）。内本さんは、休日とはどんな風に過ごされるんですか？

内本 （下を向いて、モジモジ・・・）実は・・・私、宝塚歌劇・月組の大ファンなんです。それで休日は、よく観劇に行っています。



お仕事の様子

竹中 宝塚歌劇ですか、それはよい気分転換でしょうね。

内本 はい、夢があって素敵です。歌劇を観た後は、活力がわいてくるんです。

竹中 歌劇で気分転換。で、またバリバリ働く。上手にご自分の生活を組み立てていらっしゃるんですね。どうも、今日は皆さん、長時間ありがとうございました。内本さんのアサコムでの活躍を楽しみにしています。朝日新聞社とアサコムのますますのご発展をお祈りして、今日の対談を終わらせていただきたいと思います。皆様、本当にありがとうございました。

障害を見事に自分の個性にまで高めて働いておられる内本さん。お仕事の話をする時のキリッとした表情が、最後の歌劇のお話の場面では少し恥ずかしそうに楽しそうに変化したのが印象的でした。朝日新聞社が読者との接点ともいえる職場に、障害を持つ女性を正社員として雇用されたことは、日本の報道機関の現状としては、やはり英断と言っているのではないかと思います。社会の木鐸たる使命を持つマスコミに、<sup>ぼくたく</sup>なお一層、障害を持つ人達が進出し、活躍することを願ってアサコムを後にしました。

### 朝日新聞社の概要

資本金 6億5000万円  
年間売上 約3,960億円  
\*1992年4月～1993年3月

#### 創刊日

大阪本社 1879 (明治12) 年 1月 25日  
東京本社 1888 (明治21) 年 7月 10日  
西部本社 1935 (昭和10) 年 2月 11日  
名古屋本社 1935 (昭和10) 年 11月 25日  
北海道支社 1959 (昭和34) 年 6月 1日

#### 従業員数

大阪本社 2,128 (119) 人  
東京本社 4,364 (345) 人  
西部本社 987 (45) 人  
名古屋本社 661 (36) 人  
北海道支社 232 (5) 人  
合計 8,732 (550) 人

\*1993年4月1日現在

\* ( ) 内は女性で内数

#### 販売部数

朝刊 8,218,165部  
夕刊 4,609,481部

\*1992年7月～12月ABC平均部数

### 朝日新聞社綱領 (1952年制定)

- 一、不偏不党の地に立って言論の自由を貫き、民主国家の完成と世界平和の確立に寄与す。
- 一、正義人道に基づいて国民の幸福に献身し、一切の不法と暴力を排して腐敗と闘う。
- 一、真実を公平迅速に報道し、評論は進歩的精神を持してその中正を期す。
- 一、常に寛容の心を忘れず、品位と責任を重んじ、清新にして重厚の風をたつとぶ。

#### コンピュータセミナーの開催

プロップでは毎週2回、障害を持つ人を対象にした初・中級コンピュータ・セミナーを開催しています。

\*毎週水曜日 PM 6:30～9:00 MACセミナー  
(大阪ボランティア協会と月1回はアップルセンター肥後橋で開催)

\*毎週金曜日 PM 6:30～9:00 98セミナー  
(京橋OBPにある日本電気関西支社にて開催)

いずれもコンピュータ好きのボランティアさんを募集中です。現在、どちらのコースも障害を持つ方約10名づつが受講されています。セミナー責任者は、MACセミナーは榊原淳、98セミナーは鈴木重昭です。

#### コンピュータセミナー・ボランティア募集

障害を持つ受講生とコンピュータ好きの社会人 (及び学生さん) との出会いの場が、このセミナーです。どちらのコースも、ユーザーグループの「のり」で、楽しくわいわいやっています。活動については「見学してから考えるよ」という方も大歓迎! お気軽に会場にお越し下さい。

感挿文

# 遠くで近くで 見つけたモノ

スラッシュのアメリカ体験

【後編】

「感挿文」というタイトルは、何かかっこいい当て字でもあればと考えてみたのですが……。

皆さんに何か感じる部分を捜してもらえればとムリヤリ付けています。

## 「フランクなGUY達」の巻

夏は涼しく、冬は暖かい、サンフランシスコに住む人達はみんなそう言います。もちろん、そこから地下鉄で30分しか離れていないベイ・エリアの一部であるパークリーにも、その言葉は当てはまるのです。そんな気候が人々の心をオープンにするのでしょうか。

町を歩いていて耳に付いたのは、"Excuse me."、"Sorry."、"It's OK."という短いフレーズ。単純ではあるけれど、心が温まる会話です。道を歩いていてだれかにぶつかったなら"Excuse me."

(すいません)と謝る。すると、相手は"It's OK." (大丈夫だよ)と答えてくれる。もちろん逆の会話もよく交わされます。こちらが謝っても、ほとんど何の反応も示さない日本とは大違い! そんな些細なことが、やけにうれしかったのです。

本屋でもスーパー・マーケットでも店員にアシストを求めれば気軽に対応してくれます。それは日本の店でも同じことなのですが、お互いの間に不自然な空気は立ちだからないといった印象でした。日本の場合、慣れていない店員だと、白杖を持って店に入り「何かを捜してほしいんだけど」と頼むと、ちょっと戸惑ったような様子を見せたり、やたらに気を使ってくれたりということになります。アメリカにいる間はそんなことを感

じることもなく、かといってマニュアル的な応対を受けた訳でもありませんでした。

パークリーは福祉が進んでいる町ということで、他の地域から多くの障害者を持つ人が集まってきたようです。人口の17パーセントが障害者だとか。町では車いすに乗った人や盲導犬を連れて歩く人を多く見かけました。バスのほとんどには車いすが乗り降りするためのリフトが付いていて、レストラン等には車いすの人用のトイレが設けられています。交差点では、歩道と車道との間がスロープになっていますが、利用頻度の少なそうな場所ではまだスロープ化されていない所も多くありました。歩道は広く、人通りの多い通りの車道側には駐輪用のポール・露店・信号機の太い柱が並び、また、通行の少ない通りでは、並木が植えられており、しっかりと整備されなかったのか、凸凹が目立ちました。車いす使用の人達にとってはとても住みやすそうですが、視覚障害者には設備的には、他の町となんの変わりもありませんでした。

音声信号を見たのは1度だけ。そして、点字ブロックは地下鉄のいくつかの駅のホームでだけでした。ホーム上のブロックといっても、日本のそれと違って、ホームの端ぎりぎりに設置してあるだけなのです。こんな話を聞いたことがあります。日本人が、そのようなアメリカの現状を目の当たりにした時、「これじゃあ、アメリカの視覚障害者は、一人では町を出歩けないじゃないか」と言ったそうです。逆に、アメリカ人が日本にやってきて、駅や町に張り巡らされた黄色いぶつぶつのブロックを目にした時、「日本の視覚障害者は、こんなものがないと一人で歩けないのか」と口にしたとのこと。たしかに設備は日本の方が普及しています。しかし、それが代わり、周りの人が自発的に教えてくれたり、こちらからも気軽に聞ける環境がありました。

最初のころは、とにかく現地の人と友達になろうと、何かの機会を作り声を掛けまわろうと考えていました。ところが、出会う人はアジア人ばかり。アメリカの中でもカリフォルニア州は、特にメキシコや南米、そしてアジアからやって来る人が多いらしく、道を歩いてもスパニッシュなまりの英語や、アジア系の言葉を聞くことが珍しくないのです。FMやAMラジオのステーションの中にはスペイン語だけでなく、韓国語の専門局もあるほどです。ELP（イングリッシュ・ランゲージ・プログラム）では日本人も多く見かけましたが、それ以上の韓国人と出会い、韓国のパワーには圧倒されました。

それにしても、外国人の多いこと！生活しているだけで、国際関係学を勉強している気分でした。頑固で真面目なロシア人の研究者、決して自分の意見を曲げないフランス人の女の子、家族思いのシリア人、いつも陽気なスペイン人、写真好きのアルゼンチン人、英語のクラスでいつも母国語で話そうとする日本人達など、いろいろな人に会いました。

友達からは様々なことを教わりました。就職難のこと、宗教のこと、そしてホームレスのことなどです。

福祉が進んでいるというだけに、障害者だけでなく、他の地域から彼らもまた集まってきているのです。テレグラフやシャタックという大通りの両サイドの歩道では、ホームレスの人の姿を多く見かけました。彼らのほとんどが精神的な病を持っているそうです。もちろん、失業というのもホームレスになる大きな原因の一つですが、空き缶をじゃらじゃらさせて、「小銭をちょうだい」、「お釣りを分けて」と、道行く人に声をかけます。老若男女問わず、黒人の方が多いとのことでしたが、白人もアジア人も同じようにしています。小さな子供の姿を見ると、悲しいものが込み上げてきました。もし、自分も彼らのような立場になったら、はたして生きていけるだろうかと考えさせられたものでした。

僕自身はホームレスの人には、道を教えてもらうなど、よくお世話になりました。ただ、サンフランシスコで出会ったホームレスのおばさんにはショックを与えられました。店の場所を訊いた時のことでした。店の場所を教えてくれた後、「ホームレスに道を尋ねると、君は50セントを払わないといけないんだよ」と、お金を請求してきたのです。それからは道を訊くのにも人を選ぶねばと決心しました。人に道を訊く度にお金を払っていたのでは、財布がすぐに空っぽになりますからね。

